

研究機関：32675

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520253

研究課題名（和文）『ユリシーズ』の創作に及ぼしたトリエステ、チューリヒ、パリの影響

研究課題名（英文）The Influences of Trieste, Zurich, and Paris on the Making of *Ulysses*

研究代表者

結城 英雄（YUKI HIDEO）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70210581

研究成果の概要（和文）：ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』の末尾には、「トリエステ - チューリヒ - パリ 1914 - 1921」と記されている。『ユリシーズ』はダブリンを舞台としながらも、トリエステで着想され、チューリヒで結実し、そしてパリで完成されたということだ。これらの都市の文化的・時代的背景が創作に影響を与え、作品の世界に反映していることは間違いない。にもかかわらず、作品に即したその具体的な考察は少ない。本研究はそのような状況を鑑み、ダブリンの描写に着目しながら、大陸の都市が創作に及ぼした影響を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：At the end of *Ulysses*, James Joyce wrote down “Trieste - Zurich - Paris 1914 - 1921.” Though Dublin is the main city of *Ulysses*, Joyce began to write it in Trieste, improved it in Zurich, and completed it in Paris. Surely the cultural and historical backgrounds of these cities contributed to the making of *Ulysses*. Nevertheless, there are no or few studies to take these cities into considerations in explaining the meaning of *Ulysses*. This study therefore elucidated the subtle influences of these cities on the making of *Ulysses*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：ジョイス、トリエステ、チューリヒ、パリ、アイルランド

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ジェイムズ・ジョイスは、文学の地平を徹底的に開拓した国際的な作家と賞賛されながらも、その作品の舞台がいずれも地方都市のダブリンであるというギャップにとま

どいを覚える研究者がいまだに多い。そのため、近年の『ユリシーズ』研究は、ダブリンについての知識に偏重したアプローチが中心になっている。Cheryl Herr の *Joyce's Anatomy of Culture* (1986) や Vincent J.

Chen の *Joyce, Race and Empire* (1995) などを嚆矢として、文化研究やポストコロニアル批評による解説が進められているためである。Len Platt は、*Joyce and the Anglo-Irish* (1998) において、ジョイスの文学はアイルランド文芸復興運動との対峙により開花したと指摘した。また Andrew Gibbon は、*Joyce's Revenge* (2002) において、ジョイスの文学はイギリスとの確執から展開したと論じた。こうした状況のため、ジョイスのモダニズムもダブリンとの関係で語られることが多い。たとえば、Emer Nolan は *James Joyce and Nationalism* (1995) において、モダニズムの意味を修正し、ダブリンの状況を念頭に、その言葉の再定義を試みている。実際、ジョイスの文学はダブリンという都市と不可分である。ジョイスはダブリンを前提条件として、そこに自らの物語を貸し与えていったのである。そのため、いずれの物語を読み解くにも、ダブリンの細密な地誌が必要とされるし、人物の意識を織りあげる時代精神についての知識もなければならない。もちろんそのような理想的な読者は少なく、実状ではほとんどの読者がそうした情報を収集しながら読み進めている。Annotations、Notes、Gazetteer、Census といった類の参考文献の存在はそのことを示している。個人的にもそうした参考文献の恩恵を受けてきた。

(2) その一方で、『ユリシーズ』のダブリンは必ずしも実在のダブリンと一致するものではない。これは先行作品である『ダブリンの市民』(1914)や『若い芸術家の肖像』(1916)で描かれている鬱屈したダブリンと比較してみれば明らかである。背景もこれら2作とほとんど同じであるにもかかわらず、『ユリシーズ』で描出されるダブリンは、どこから見てもモダンな都市である。『ダブリンの市民』は同国人を読者対象として、その麻痺的なダブリンの状況を暴露した。また『若い芸術家の肖像』は、芸術創作のため、閉塞的なダブリンから脱出せざるを得ない主人公の必然性を描いた。それと対照的なのが『ユリシーズ』で、ダブリンという地方都市よりも、広く都市一般を対象としたと思われる。その契機となったのが、ジョイスの移り住んだトリエステ、チューリヒ、パリという都市の影響であったと思われる。『ユリシーズ』の末尾の「トリエステ - チューリヒ - パリ 1914 - 1921」はそのことを示しているが、しかしそのことを問題とする研究は少ない。

(3) そこで本研究は『ユリシーズ』の意味を解説するため、そのコンテクストを展望し、トリエステ、チューリヒ、パリがその創作に及ぼした影響を明らかにすることにした。ダブリンを舞台としながらも、主人公がユダヤ人の血を引いているという不自然さも、そのコンテクストにおいて意味を持つと思われる。

る。

## 2. 研究の目的

本研究は3年をめどに、ジョイスが移り住んだ都市であるトリエステ、チューリヒ、パリが『ユリシーズ』の創作にどのような影響を及ぼしたのか、作品に即して考察することにある。各都市の文化的・歴史的背景を探ると同時に、作品への具体的な反映を明らかにする。資料としては、ジョイスの伝記や交遊録とともに、創作の拠り所とされた文献を用いて、『ユリシーズ』の大陸的な側面を解説する。

(1) 2008年度はトリエステを中心に、『ユリシーズ』誕生の経緯をたどる。ジョイスは1904年にダブリンを脱出後、1915年にいたるまでの10年間のほとんどをトリエステで過ごした。この都市はオーストリア=ハンガリー帝国支配下にあったために民族主義が高揚しながらも、同時に多民族・多言語の都市でもあった。ジョイスは故郷であるダブリンとの距離を測定しながら、自らの文学の方向を確認することになる。『ユリシーズ』の着想もトリエステであった。言語、宗教、民族といった『若い芸術家の肖像』でのジョイスの基本テーマを再検討するとともに、新しい思想とも出会うことになった。

(2) 2009年度はチューリヒを中心に『ユリシーズ』を検討する。ジョイスは、第一次世界大戦が勃発したため、1915年にチューリヒに疎開し、1919年までその地にとどまった。この時期のジョイスは性、表現主義、ダダイズムといった新しい動向に遭遇している。そのため、ジョイスが新しい思想とどう関わったかを考察し、『ユリシーズ』の文体の変転の意味を析出する。

(3) 2010年度はパリを中心に、『ユリシーズ』がいかにか改稿されたのか、その文化的・歴史的な背景を解説することとする。ジョイスは1920年にパリに移り住み、『ユリシーズ』の完成に奮闘するが、出版事情とあいまって、創作の方針を変更せざるを得なかった。その背景には、国際色豊かな当時の文学風土も関わっていた。出版にからむ性や検閲といった複雑な状況を中心に、『ユリシーズ』におけるダブリンの再創造の意味を検討する。

## 3. 研究の方法

本研究は、ジョイスが移り住んだ都市であるトリエステ、チューリヒ、パリが『ユリシーズ』の創作にどのような影響を及ぼしたか、作品に即して考察するものである。そのため、各都市の文化的・歴史的背景を順に探ると同時に、作品へのその具体的な反映を明らかにする。資料としては、ジョイスの伝記や手紙や交遊録などとともに、創作の拠り所とされた文献、特に M. P. Gillespie 編 *James Joyce's*

*Trieste Library* (1986)、Catherine Fahy 編 *The James Joyce/Paul Leon Papers* (1992)、James Atherton 著 *Books at the Wake* (1959)、Danis Rose & John O'Hanlon 著 *Understanding Finnegans Wake* (1982)の巻末の資料、さらに『ユリシーズ』や『フィネガンズ・ウェイク』それぞれを掲載した雑誌 *The Little Review* や *Transition* なども参考にしたい。以下は各年度の計画である。

(1) 2008年度は、先行作品との関係から開始し、『ユリシーズ』のダブリンが再創造された都市であることを明らかにする。そのためトリエステを中心に、同時代の未来派、映画、精神分析、音楽などの影響を読み取る。①未来派については、主に都市の描写に注目し、ダブリンをめぐる同じ場面であっても、機械文明の強調やシンタックスの実験のために、異なった都市風景になっていることを明らかにする。

②作品のあらゆる部分にその影響が認められる映画については、特にエイゼンシュタインのモンタージュの理論と関連させ、モダンな都市ダブリンの描出の意味を考察する。

③精神分析の影響についてはこれまで無視される傾向にあったが、ジョイスはフロイトの著作も所持していたのである。そしてこの段階では、その反映を第9挿話のシェイクスピア論を取りあげ、その影響を解説したい。また当初からジョイスの関心事であった音楽については、ワーグナーのライトモチーフとの関連において考察する。

(2) 2009年度はチューリヒを中心として、『ユリシーズ』の解説を試みる。第一次世界大戦のため、ジョイスはチューリヒに退去し、『ユリシーズ』の創作に打ち込んだ。この時期、ジョイスは実験的な手法を試みているが、それは時代の思想を意識したためであり、その結果としてダブリンが再創造されるのは必然であった。

①それに加え、チューリヒは戦争忌避者や疎外者や国外退去者などを含む人種のるつぼで、脱国籍的な雰囲気にあふれ、ジョイスは戦争の持つ意味に憑かれていた。『ユリシーズ』における都市の崩壊のイメージや価値観の相対化など、そうした状況から着想されている。したがって、そのような観点からすれば、性をめぐる思想、ダダイズム、表現主義などが取り込まれ、ダブリンが再創造されたのも不思議ではない。

②性はナショナリズムや戦争という側面から、幅広い考察が必要である。ダダイズムはチューリヒで宣言され、ジョイスはその言語の実験と一線を画しながらも、伝統的な価値観を否定するところでは意見が一致し、同時代のソシュールやヴィットゲンシュタインなどの影響も考慮しながら共通点を探る必要がある。さらにこの時期のチューリヒでは、

表現主義の演劇活動も盛んであり、ジョイスもいやおうなくその手法と向き合うこととなっただろう。

(3) 2010年度はパリを中心として、『ユリシーズ』の解説を試みる。ジョイスは1920年にエズラ・パウンドの勧めもあり、パリに移り住む。『ユリシーズ』はすでにアメリカの前衛誌の『リトル・レビュー』に掲載中であったこともあり、パリでのジョイスはそれなりの尊敬を受けていた。

①パリには世界の文学者が集い、前衛的な手法はジョイスのトレードマークにもなっていた。そのため、実験的な手法の追及は『ユリシーズ』の創作では不可避な事態になっていたことを検討する。

②その一方、『ユリシーズ』の内容をめぐり、『リトル・レビュー』での掲載が中止となり、パリでの出版という運びとなった。こうした状況が『ユリシーズ』の創作にさらに影響を与えたことは予測に難くない。『ユリシーズ』の詳細な「計画表」の作成、また「計画表」に即した創作の変更もそうした状況を示唆している。こうした事情をテキストと関連させて検討する。

③そうしたうちでも、パリが及ぼした影響として、ユダヤ人問題、戦争、性といった観点は見逃せない。いずれの主題もこれまでの考察の対象となっていたが、それらの問題を改めて認識させたのはパリであった。パリではユダヤ人問題が国家的な議論になっていたし、民俗学の研究も盛んであった。また戦争の後遺症も生々しく、文学のテーマとされていた。さらに性も出版事情との関連で問題となっていた。そのような事情をテキストと関連させて検討する。

#### 4. 研究成果

本研究は『ユリシーズ』をめぐり、ジョイスが移り住んだ大陸の都市、トリエステ、チューリヒ、パリとの視点からの解説を試みることにあった。ダブリンを中心としたこれまでの研究への問題提起であると同時に、今後の研究への新たな視点の提示でもある。実在のダブリンとテキスト化されたダブリンとの相違、またその背景にあるトリエステ、チューリヒ、パリの与えた創作への具体的な影響、さらに作者ジョイスの文学的姿勢などを明らかにしながら、ジョイス研究の新たな地平を開こうとするものであった。

現在の『ユリシーズ』研究も、またジョイスのその他の作品についての研究も、ほとんどダブリンの歴史的背景との関連で進行しているにすぎない。もちろん、ダブリンに関わる知識は、『ユリシーズ』を解説するのに不可避な前提であるし、その知識がないかぎり、再創造の意味は読み取れない。しかし、アイルランドからの研究に新たな展望が見

られないことにも、その閉塞状況が示唆されている。本研究はそのような状況を打破することにあつた。

ジョイスの作品はほとんどが引用の織物になっている。その点では『ユリシーズ』も同様で、アイルランド文学のみならず、大陸のモダニズム運動、あるいはヨーロッパの文学伝統との対話として読まれてきた。したがって、ダブリンと同じく、チューリヒ、トリエステ、パリもその主要な舞台であるという本研究の視点は当然である。にもかかわらず、この自明の事柄にそれほど注意が払われてこなかったのは、ダブリンについての圧倒的な知識が要求されたためであったことも大きい。その意味で、本研究はこれまでの研究に対する修正となつたと思われる。

(1)2008年度はトリエステを中心に、この都市が及ぼした『ユリシーズ』の創作への影響を検討した。取りあげたのは第1挿話から第9挿話にいたるまでである。主要な問題として、断片化、精神分析、未来派などについて解説し、ダブリンの描写に修正がほどこされているところを明らかにした。

①断片化は人物の知覚の問題として、『ユリシーズ』の底を流れる一貫したテーマである。すでに物象化の時代でもあつた。この問題を意識の描写で捉えたのがジョイスであつた。第1挿話からその影響が認められる。

②精神分析はスイスを中心であつたが、トリエステにおいても、やはり知識人たちの関心になっていて、ジョイスの創作に影響を及ぼした。やはり第1挿話からその影響は認められる。

③未来派については、ジョイスとマリネッティとの関連がある。「未来派宣言」によって機械文明を礼賛したマリネッティの拠点がまさしくトリエステであり、その影響は、チューリヒでのダダイズムの場合と同じく、第7挿話に感じられる。

(2)2009年度は、前年度の知見を基礎にして、チューリヒを中心に、この都市が及ぼした『ユリシーズ』の創作への影響を検討した。取りあげたのは第14挿話にいたるまでである。主要な問題として、モンタージュ、音楽、猥褻、言語などについて解説し、2008年度に続き、ダブリンの描写に修正がほどこされているところを明らかにした。

①モンタージュも『ユリシーズ』の底を流れる手法であるが、その手法が顕在的なのは第10挿話である。ジョイスはトリエステの実業家から資金を募り、ダブリンに映画館を開館したことがある。そのことは経済事情のみならず、ジョイスの映画に対する関心の現れでもあつた。

②音楽についてはダブリンの時代からジョイスの関心事であつたが、トリエステではオペラを鑑賞することも多く、さらにチューリヒ

でも音楽会に足を運んでいた。その顕著な影響が第11挿話に認められることを明らかにした。

③猥褻は性的問題としてジョイスの関心事であつたが、これは伏在したままであつた。次年度の研究として考察することにした。

④言語についてのジョイスの関心はすでに作品の初期からうかがえるが、実のところ、その最も顕著なのが第3挿話の描写で、チューリヒで書かれたものである。当時のスイスにはソシュールがおり、言語についての革新的な思想ともなつていた。

(3)2010年度はパリを中心に、この都市が及ぼした『ユリシーズ』の創作への影響を検討した。取りあげたのは第15挿話以降で、猥褻の問題と創作との関わりを探った。

①ジョイスは1920年にパリに移り住んだが、この年はきわめて多難であつた。第13挿話が『リトル・レビュー』に掲載された後、第14挿話の一部を発表しただけで以降の挿話の掲載は打ち止めになつた。そのため『ユリシーズ』の掲載が危ぶまれた。理由は第13挿話が猥褻であるとアメリカで告訴されたことによる。実際、翌1921年には猥褻であると宣言され、出版の可能性がほとんど不可能になつていた。

②それでもパリは華やかで、ジョイスの文学も評価されていた。そしてパリで書店を営んでいたシルヴィア・ビーチによって、『ユリシーズ』の出版の許可が与えられたのである。こうしてジョイスは第15挿話以降の残りの挿話を仕上げ、同時にそれ以前の挿話の手直しを始めたのである。そうしたパリでのジョイスの創作をめぐる、テキストに即して具体的な問題を明らかにした。

③ヨーロッパを巻き込んだ第一次世界大戦は、旧秩序の認識に対する根本的な問いを突きつめていた。そのため、すでに未来派、映画、精神分析、歴史、哲学、言語学、物理学、民俗学、音楽、絵画などの新しい思想を吸収していたが、パリではそうした分野の認識を取り入れた創作をさらに展開しながらも、猥褻の問題にも積極的に取り組んだ。ジョイスは手法の実験を推し進める一方で、猥褻を回避するための方策を講ずることになつたのである。

④この時代のパリは、プルースト、ジッド、ヴァレリーらが活躍すると同時にダダイストも移り住んでおり、さらにはいわゆる「失われた世代」と呼ばれるアメリカの作家たちもガートルード・シュタインのまわりに群がっていた。そうした状況において、ジョイスは猥褻の問題を回避するため、『ユリシーズ』が高踏的な文学であることを示すため、先行挿話を書き直しつつ、第15挿話以降の作品も修正し、百科全書的な作品に仕上げたことを明らかにした。

以上により、ジョイスの描いたダブリンは、歴史的な都市であると同時に、トリエステ、チューリヒ、パリといった大陸の都市の文化によって再構成された都市であることが立証された。今後の『ユリシーズ』の読解に資するところ大だと思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計16件)

- ① 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100のQ&A(12)』、『すばる』(集英社)、pp. 278-294、査読無、2011年4月
- ② 結城英雄「ジョイスの時代のダブリン(11)」、『法政大学文学部紀要』第62号、pp. 43-55、査読無、2011年3月
- ③ 結城英雄「ジョイスの時代のダブリン(10)」、『法政大学文学部紀要』第61号、pp. 73-85、査読無、2010年10月
- ④ 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100のQ&A(11)』、『すばる』(集英社)、pp. 212-226、査読無、2010年10月
- ⑤ 結城英雄「ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』—レオポルド・ブルームの放浪の背景」、『現代イギリス文学と場所の移動』第9巻(金星堂)、pp. 43-60、査読有、2010年7月
- ⑥ 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100のQ&A(10)』、『すばる』(集英社)、pp. 188-206、査読無、2010年4月
- ⑦ 結城英雄「ジョイスの時代のダブリン(9)」、『法政大学文学部紀要』第60号、pp. 69-83、査読無、2010年3月
- ⑧ 結城英雄「W. B. イェイツとジェイムズ・ジョイス—対立と統合」、『プラハとダブリン』(日本独文学会叢書066)、pp. 46-60、査読無、2009年10月
- ⑨ 結城英雄「ジョイスの時代のダブリン(8)」、『法政大学文学部紀要』第59号、pp. 1-14、査読無、2009年10月
- ⑩ 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100のQ&A(9)』、『すばる』(集英社)、pp. 192-209、査読無、2009年8月
- ⑪ 結城英雄「ジョイスの時代のダブリン(7)」、『法政大学文学部紀要』第58号、pp. 19-32、査読無、2009年3月
- ⑫ 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100のQ&A(8)』、『すばる』(集英社)、pp. 254-270、査読無、2009年1月
- ⑬ 結城英雄「ジョイスの時代のダブリン(6)」、『法政大学文学部紀要』第57号、pp. 33-45、査読無、2008年10月
- ⑭ 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100のQ&A(7)』、『すばる』(集英社)、pp. 274-286、査読無、2008年9月
- ⑮ 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100

- のQ&A(6)』、『すばる』(集英社)、pp. 282-296、査読無、2008年5月
- ⑯ 結城英雄『『ユリシーズ』を読む—100のQ&A(5)』、『すばる』(集英社)、pp. 284-296、査読無、2008年4月

[学会発表] (計1件)

- ① 結城英雄「ジョイスの亡霊——ヒーニーとウォルコットへの啓示」日本ジェイムズ・ジョイス協会 第22回大会、2010年6月19日、早稲田大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

結城 英雄 (YUKI HIDEO)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号：70210581

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし